



電子計算機が搬入された日（昭和41年）

もくじ

暮らしに生きることば	1
研究室から：	
『現代日本語書き言葉均衡コーパス』進捗報告(1)	2
言語使用の地域差・年齢差を調べる	4
デジタルマップになった『日本言語地図』	5
創立60周年に寄せて：	
“今は昔”創設当初の思い出	6
「方言文法全国地図」データの電子化	7
報道発表を行いました	6
ことばQ&A	8
「ことば」フォーラムのお知らせ	8
表紙のことば	8

暮らしに 生きる ことば

うろ覚えのことば

普段何気なく使っている言葉の中には、漢字・意味・使い方など、うろ覚えのまま使っている言葉は意外と多いのではないのでしょうか。特にインターネット上のホームページやブログでは、ほかの人のチェックを受けることなく自由に文章が書けるため、うろ覚えの言葉がそのまま使われているのを目にすることも多くなりました。その中のひとつが「忘備録」です。

いつ何をしたか、どのようなやり方でやるかなど、自分自身のための記録をつけたサイトでよく使われている言葉です。特に違和感を感じない方も多いかもしれませんが、辞書では、「備忘録」だけが載っているか、「備忘録」の説明の中に補足として「忘備録」という表記が載っているだけという扱いになっています。それでも、「忘れたときに備えてつけておく記録」という意味はわかっているからこそ、素直にそのままの順番で「忘備録」としてしまうのだとすれば、「忘備録」を使う人が多いのも少しわ

かるような気がします。

しかし、インターネット上の文章はパソコンや携帯電話で漢字変換をして入力するのが普通です。「備忘録」はもちろんきちんと漢字変換できますが、いくつか試してみた範囲では「ぼうびろく」を「忘備録」と変換できるものは見当たりませんでした。手書きの場合ならともかく、わざわざ一文字ずつ漢字に変換してまで「忘備録」と入力しているのだとしたらちょっと不思議な感じもします。

さらには、「忘備録」の「ぼうびろく」という音をそのまま漢字変換してしまったような「防備録」や、その類似形「備防録」、そこから「忘れるのを防ぐ」と発展させたかのような「防忘録」「忘防録」など、「備忘録」と似たさまざまな表現が見つかります。

うろ覚えの言葉は、ほかの人が使っているのを見聞きしても、形・音・意味などが近いために、自分が使っているものと違うことに気づきにくいものです。漢字変換してもうまく変換できないときなど、ちょっと気にかけてみるといいのかもしれませんが。

(植木 正裕)

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』進捗報告（1）

現在、国立国語研究所研究開発部門では、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の構築を進めています。これは、現代日本語のさまざまな書き言葉をバランスよく集めた、1億語規模のデータベースです。2006年度から2010年度までの5年間に構築を進め、その後一般公開する予定です。なおこの計画の一部は、文部科学省科学研究費補助金特定領域研究「日本語コーパス」の補助により実施しています。

今回から3回にわたって、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の構築について御紹介します。

書き言葉のサンプリング

コーパス構築の最初に必要となるのが、コーパスの設計、およびサンプリング作業です。コーパスの設計では、そのコーパスの中身をどのような構成にするか、どのような手続きでサンプルを収集するかを決定します。サンプリングでは、実際の書き言葉の紙面から、コーパスに格納する文章を抽出します。

〈コーパスの設計〉

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』は、図1に示すように、「生産実態サブコーパス」「流通実態サブコーパス」「非母集団サブコーパス」という3つのサブコーパス（SC）から構成されます。

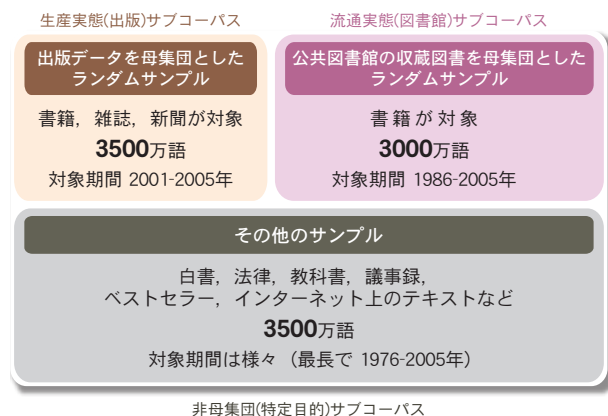


図1 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の構成

生産実態 SC では、2001年から2005年までに発行されたすべての書籍・雑誌・新聞を対象とします。流通実態 SC では、1986年から2005年までに発行された書籍のうち、都内公共図書館で広く収蔵されている書籍を対象とします。非母集団 SC では、上

記二つの SC には入らないものの、現代日本語の研究にとって重要と思われる書き言葉を対象とします。

生産実態 SC・流通実態 SC では、対象となるすべての書籍・雑誌・新聞に含まれる「文字数」を基に、統計的に厳密な方法でサンプル抽出を実施します。例えば、生産実態 SC で対象とする、2001年から2005年の間に発行されたすべての書籍について調査したところ、合計317,117冊、74,911,520ページの中に、48,539,925,351文字が含まれている、という推計結果が得られました。これを「日本十進分類法（NDC）」で分類すると、表1のようになります。

表1 約32万冊の書籍に含まれる文字数の内訳

NDC	推計総文字数	構成比
0. 総記	1,636,414,548	3.37%
1. 哲学	2,597,610,813	5.35%
2. 歴史	4,301,204,340	8.86%
3. 社会科学	12,408,321,943	25.56%
4. 自然科学	5,069,594,034	10.44%
5. 技術工学	4,615,929,967	9.51%
6. 産業	2,196,387,437	4.53%
7. 芸術	3,258,432,447	6.71%
8. 言語	888,800,128	1.83%
9. 文学	9,341,275,486	19.25%
n. 記録なし	2,225,954,208	4.59%
合計	48,539,925,351	100.00%

この推計結果を基に、「総記」に分類される書籍からは書籍のサンプル全体の3.37%にあたる量を、また、「文学」に分類される書籍からは全体の19.25%にあたる量を、それぞれ無作為に抽出します。生産実態 SC 全体では、書籍から12,604サンプル、雑誌から2,730サンプル、新聞から1,666サンプルを取得することにより、合計約3,500万語分のサンプルが得られると試算しています。このような方法（層別ランダムサンプリング）により、対象とする書き言葉全体の精密な縮図となるようなサンプルが得られます。

〈サンプリング作業〉

サンプリング作業では、無作為に選ばれた書籍・雑誌・新聞から、そこに書かれている文章をサンプルとして抽出します。実際の印刷紙面は、いわゆる

本文だけでなく、図や表、グラフ、キャプション、脚注など、さまざまな部分から構成されています。ここから一定の基準にしたがって、コーパスに格納する文章を抽出していくことになります。

抽出するのは、印刷紙面の中からやはり無作為に選ばれた1文字を基準として1,000文字を抽出する「固定長サンプル」、および文章の論理的な構造（節や章など）を単位として抽出する「可変長サンプル」という2種類です。このためには、数万冊におよぶ書籍・雑誌・新聞を手にとることになります。現在、国立国会図書館、東京都立図書館、立川市図書館、八王子市図書館などの諸機関から御協力を仰ぎながら、サンプリング作業を進めているところです。

(丸山 岳彦)

資料の電子化

サンプリングされた資料は、コンピュータで扱えるように電子的なテキストにします。このとき、ただ単に電子的なテキストにするだけでなく、言語研究をするときに役立つ、さまざまな情報を付加します。

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』では、46種類の付加情報を用意しています。付加情報には、大きく分けて、次の3種類があります。

- ・文書構造（例：章節のタイトル・範囲、段落、文）
- ・文字・表記（例：誤字、ルビ）
- ・サンプル（例：書誌情報、著者情報）

図2（右）は、原資料の例（警視庁：警察白書平成14年度版 p.244, 245から転載）です。図2（左）は、この原資料を電子テキストに変換したデータです。なお、図表は前述のサンプリング作業の抽出対象外となっているため、電子テキストにはなりません。どのような図表があったかを示すために、キャプションを入力します。

電子テキストを見ると、原資料に明示的に書かれている本文だけでなく、いろいろな情報が付加されていることがわかると思います。例えば、図2（右）の原資料冒頭にある、節タイトル「交通管理による環境対策」は、電子テキストでは、〈titleBlock〉と〈/titleBlock〉で囲うことにより、タイトルであることが明示的に表現されています。また、titleBlock以外にも、paragraph（段落）やsentence（文）などの情報が付与されています。

このような付加情報を含め、電子テキストの形式は、「XML」と呼ばれる標準的なデータ形式で記述されます。XMLは、標準化された手続きでデータを変換したり、検索したりすることができるので、例えば、タイトルだけを抽出して調査するといったことが容易にできます。

以上のように、標準的な形式を持ち、さまざまな言語学的情報が付与されたコーパスを作成することにより、多くの人が手軽に言語研究に活用できるようになることが期待されます。（山口 昌也）

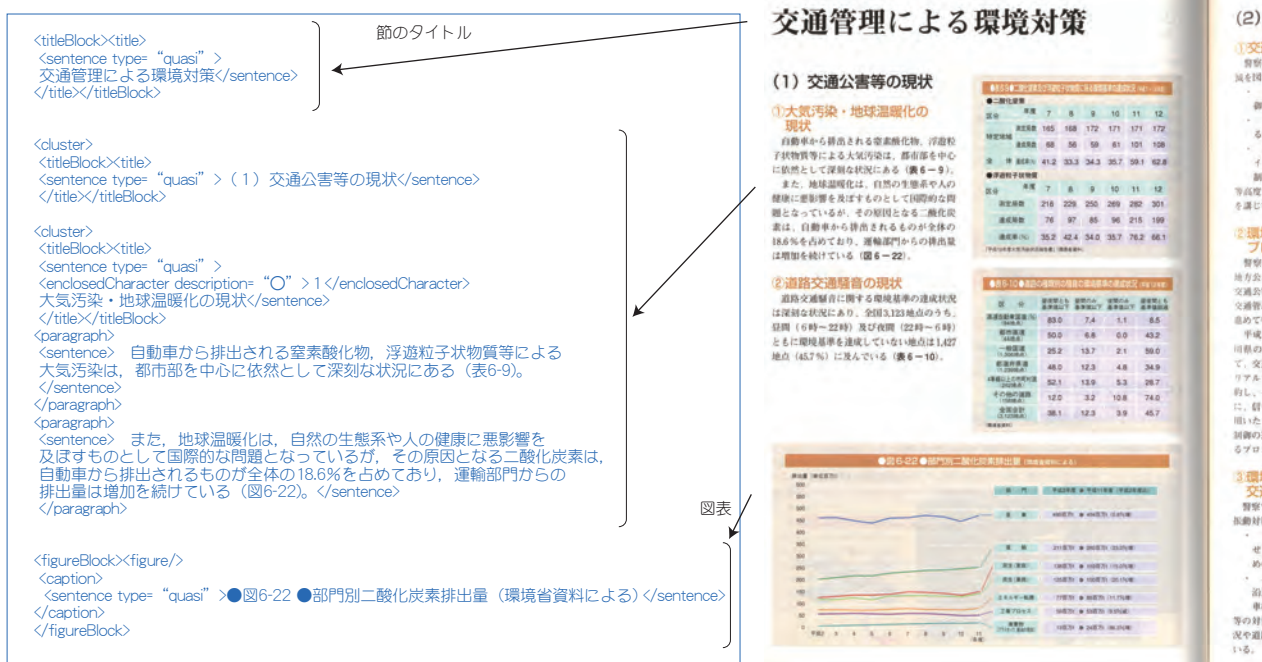


図2 原資料と電子テキストの例

言語使用の地域差・年齢差を調べる

■言葉の使用を調べる観点

ある言葉が世の中でどれくらい使われているかを調べる場合、大きく二つの観点と考えられます。

一つは、人々により書かれたり話されたりした言葉を大量に集め、その中に当該の言葉がどれくらい出現するかを分析する観点です。

もう一つは、言葉の発信者、つまり書き手や話し手に注目し、当該の言葉を使う人が世の中でどれくらいいるかを分析する観点です。

前者は言語使用を言葉そのものから見、後者はそれを言葉の使用者から見ることになります。

言語使用の研究はこれら二つの観点から総合的に進められるのが望ましいでしょう。例えば「見れる」という表現ですが、世の中でどれくらい使われているのか、またそれを使う人はどれくらいいて、年齢差・性差・地域差はどうなっているのかの把握です。

■話し手による言葉の違い

話し言葉、中でも日常場面での話し言葉は、話し手により使用が異なる面が少なくありません。そのため使用者という観点は研究に不可欠です。

話し手により使用が異なるということは、他者の言葉に接したとき違和感を持つ場合がありうるということにつながります。とりわけ、他者への配慮を示す表現に年齢差や地域差がある場合は、相手を誤解する可能性もあります。話し手という観点からの研究は、単に言葉の多様性を把握するだけでなく、言葉の誤解を考えるための基礎研究ともなります。

■援助を申し出る表現—「～てさしあげる」などの使用—

他者への配慮が現れやすいコミュニケーション場面の一つとして、困っている人に対し援助を申し出る場面を考えてみましょう。

例えば、知っている目上の人が重い荷物を持っていて、代わりに自分が持つことを申し出るとします。相手が友達や家族であれば「持ってやろうか？」のように「～てやる」が普通に使えますが、目上の人に「持ってやりましょうか？」は一般に使いにくいと思われがちです。敬語を含む「～てあげる」や「～てさしあげる」に置き換えても同様です。こうした「授恵表現」には恩着せがましさ、今風の言葉で言えば“上目線”のニュアンスが伴うからです。

しかし、こうした場面で授恵表現が使えるかどうかには、年齢差や地域差があるようです。

■調査してみると…

2007年3月に民間の調査会社に委託して全国の1,343人を調査し、発話回答中に授恵表現があるかないかを分析しました。

全体としては「あり」は10%と少数派でしたが、年齢層別に分析すると、図1のように「あり」の数値は高年齢層ほど高くなります。また、地域別に分析すると、図2のように「あり」の数値は東北地方で高くなります（括弧内の「N=」の数値は回答者数。グラフ中の数値は小数点第一位の処理のため合計が100にならない場合があります）。

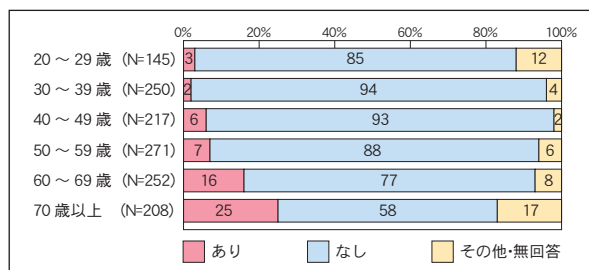


図1 目上の人に対する授恵表現（年齢層別）

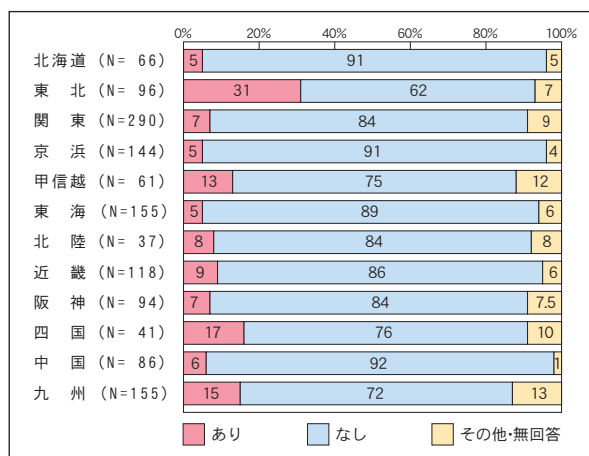


図2 目上の人に対する授恵表現（地域別）

このように実際に調査してみると、授恵表現の使用には地域差や年齢差があることが分かります。

年齢や地域が異なる人とこのような場面で話をし、違和感を持つとしたら、こうした年齢差や地域差が背後にあることが一因として考えられます。

なお、詳しい分析については拙稿「援助申し出場面における授恵表現『～てやる／～てあげる／～てさしあげる』の使用」（『待遇コミュニケーション研究』第5号、2008年）を御覧ください。

（尾崎 喜光）

デジタルマップになった『日本言語地図』

国立国語研究所が調査・編集した『日本言語地図』が、インターネットポータルサイト Yahoo! JAPAN の中で、Web 版デジタルマップになって登場しました(特集「ご当地万歳!」,掲載期間:2008年4月16日~6月15日,現在は掲載終了)。

『日本言語地図』(全6巻,1966~1974年,大蔵省印刷局刊)は、「かたつむり」「つらら」「大きい」など260のことばについて、全国の方言を収集し、地図化したものです。調査は、1957(昭和32)年から1965(昭和40)年にかけて、全国2400地点で行われました。方言の話し手は、1903(明治36)年以前に生まれた各地生え抜きの方々です。ここでは、共通語の影響が今のように及ばなかった時代の、全国的な方言の状況が記録されています。

今回はこの中から、「ものもらい」の方言地図がデジタルマップ化されました。「ものもらい」は、目の縁にぷつとできる小さなできものことですが、若い人たちの会話の中でも、時に、地域による違いが話題になることばだといいます。デジタルマップ化には、「日本語情報資料館:『日本言語地図』データベース」(<http://www.kokken.go.jp/lajdb/>)で公開されている電子化データを使用しました。

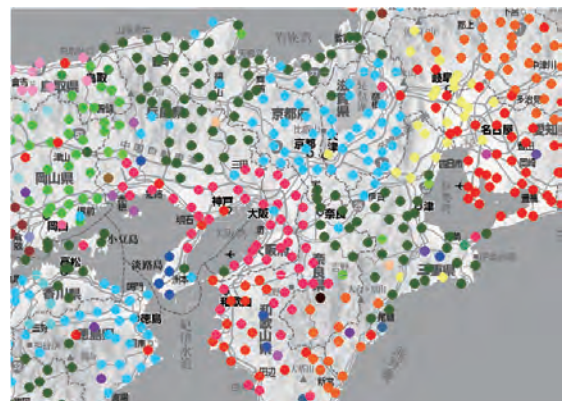
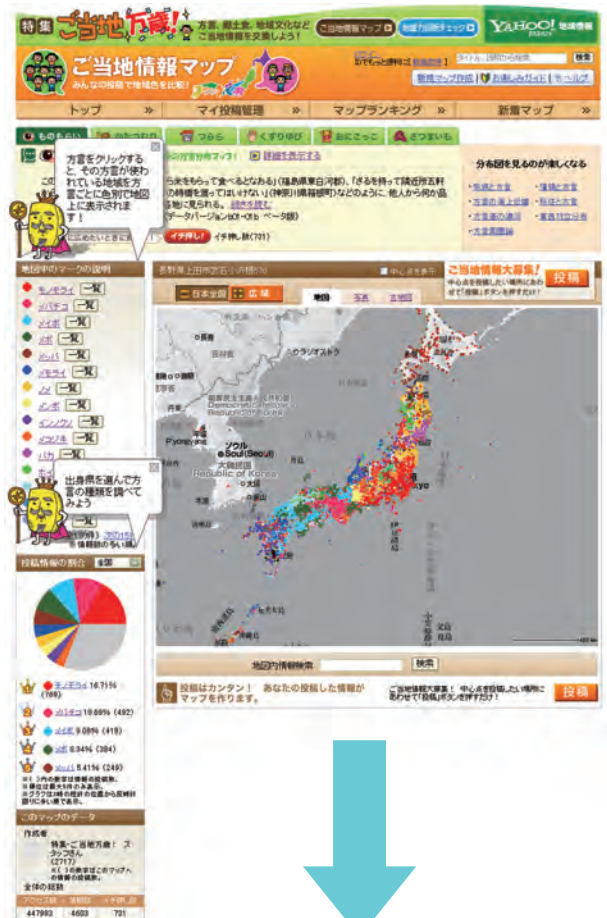
このWeb版デジタルマップシステムには、紙媒体の出版物にはない、いろいろな機能が付加されています。とりわけ大きな特徴は、閲覧者が、Web上の地図の自分が選んだ地点に、自分の知っている方言を、自分で書き込むことができる、という点です。こうして新たに書き込まれた情報は、『日本言語地図』から50年後の現在の方言の状況を示すことになります。また、最も多く回答された方言形は「メバチコ」で、近畿地方を中心に分布している、といったことも一目でわかります。

国立国語研究所では、この取り組みを、日本全国の広い地域の多くの人たちから、日本語の使用実態や言語意識について、迅速にデータを収集するための手法開発のテストケースと位置付け、インターネットの分野で高い技術力を持つヤフー株式会社と連携して研究を行ってきました。

この特集では同時に、国立国語研究所の過去の言語生活調査で行ったのと同じ、言語意識に関するアンケート調査も実施しました。実は、このようなWeb

調査は、書き込んだ人の言語的背景が十分に把握できないなど、言語調査としての問題点も指摘されています。エンターテインメントの要素も加味したWebサイトで迅速に大量のデータを収集すること、学術研究目的での利用に堪えるデータの質を確保すること—その両立については、収集したデータの分析とともに今後の課題と言えるでしょう。

(三井 はるみ)



Web版デジタルマップ「ものもらい」の
全国表示画面と地域表示画面



創立60周年に寄せて

国立国語研究所は今年12月20日、創立60周年を迎えます。今号と次号の2号にわたり、元所員の方々に、在職当時の国立国語研究所の調査研究事業の様子や思い出を紹介していただきます。

“今は昔”創設当初の思い出

齋賀 秀夫（国立国語研究所名誉所員）

<厳寒の絵画館>

国立国語研究所は、1948年の創設から5年半、明治神宮外苑のシンボルでもある聖徳記念絵画館を仮住居として過ごした。戦後日本の復興がまだ緒についたばかりで、国民の大半は衣食住とも不自由な生活を強いられていた時代であり、研究の遂行にも様々な支障があった。花崗岩^{かこうがん}で外装された絵画館の正面から左半分の地階（外見では一階）部分を借用したのだが、この石造りの建物は、絵画の保存・展示には適していても人間の居住空間としては良好なものではなく、特に冬場の寒さには閉口した。煙突を屋外に出しては絵画館の美観が損なわれるという理由で、石炭ストーブの設置が許されず、やむなく炭火をいけた大火鉢がそこそこに置かれただけだった。それで換気不十分のせいもあって一酸化炭素中毒にかかる所員も何人か出たりした。翌年の冬からはストーブが解禁になったが、それも四つの部屋のストーブに対して屋外に出せる煙突は一本だけという制約があり、暖房効果はそれほど上がらなかった。所員たちは、寒さの厳しい日には毛布で腰から下を覆ったり、オーバーを着込んだまま机に向かったりして、それぞれに自衛策を講じたものだ。筆者もポケットウイスキーの空き瓶に熱湯をいれて懐炉代わりに使ってみたが、すぐに冷めてしまい“特効薬”にはならなかった。空調完備の生活に慣れた現代人にとっては想像もできない苦難であった。

<すし詰め研究室>

絵画館左端のやや突き出た大部屋に研究部所属の全員が入った。所員約30人のほか、常勤アルバイト（後の臨時筆生）や内地留学生も加えて総勢50～60人が執務するという窮屈さだったが、その反面、利点もあった。初対面だった所員同士の顔と名前がすぐに覚えられたり、お互いのコミュニケーションも十分に取れたりしたことだ。そして、そのことが、国研発足当初のスローガンでもあった“共同研究”の推進にも大いに役立った。

国語研究所を挙げての初年度の共同研究は、「白

河市での言語生活の実態調査」であり、筆者も11月の前調査と12月の本調査に調査員の一員として参加した。この調査の内容・結果については報告書（国立国語研究所報告2）に詳述されているが、そこに記されていないこぼれ話を一、二紹介する。

<国語研初の録音機>

新しい試みの「24時間調査」（個人の一日の言語生活を観察し、記録する）に備えて、所は米国製のワイヤーレコーダーを購入した。かなり大型で重量のある機器だったが、それを手製の大きなリュックサック（麻袋）に収めて、屈強の所員が交替で背負い運搬したが、現地では故障して全く使い物にならず、結局、同調査は調査員たちの手書き作業に頼らざるをえなくなり、文字通り“骨折り損”に終わった。

<ガリ版刷りの略画>

面接調査で被調査者から発音・アクセント・語形などを聞き出すために何枚かの略画が用意された。ガリ版刷りで作成したものだが、その絵の巧拙が調査結果にも影響を及ぼした。「カメラ」と「写真機」のどちらの語形で答えるかを調べるために、前調査の際は当時出回りかけていた新型カメラを描いた略画を提示した。ところが被調査者の多くは首を傾げるばかりでなかなか反応が得られない。中には「煙草盆^{たばこ}」と答える人もいたりして、調査員を悩ませた。その反省から本調査の際には旧式の蛇腹式カメラの略画に変更したところ、今度は「写真機」という反応が圧倒的に多く、「カメラ」と答えた人は少なかった。絵の巧拙が回答結果に影響した一例である。いずれにせよ、写真やコピー機・録音機などが自由自在に利用できる現代人にとっては思いも及ばない、60年も昔の研究事情の一端である。

報道発表を行いました

国立国語研究所は、国立情報学研究所（NII）と共同で「Yahoo! ブログ」のデータの研究利用について報道発表を行いました（4月23日）。

国語研は、ヤフー株式会社から「Yahoo! ブログ」に投稿された記事の提供を受け、そのデ

「方言文法全国地図」データの電子化

沢木 幹榮 (信州大学人文学部教授)

<データの電子化とは>

「方言文法全国地図」(以下 GAJ と略)のもとになったデータはすべて電子化されているがこれだけの規模の言語地図では世界的に見てもほかに例がないと思われる。ここでは、その経緯について簡単に述べたい。

「日本言語地図」(LAJ) のときもそうだったが、調査した結果はまず調査票に記入されそのあとで所定のカードに転記される。地方研究員からの報告はこのカードを提出することで行われる。言い換えれば、GAJ の全データはカードの形でまず存在しているのである。

1984 年から始まり 1988 年ごろまで続いた作業(当時はコンピューター入力と言っていた)は、カードに記入された情報すべてをそのまま入力することをめざした。その目的は地図作成の機械化とデータベース化だったが、そのどちらも第 1 集刊行時よりあとになって達成された。データの整備は地図集が順次刊行されている間も続き、最終的に現在の形になるが、私に関わったのはデータ整備より最初の入力作業の部分だった。

<作業の流れ>

入力そのものは業者に外注した。納品は最初はパンチカードで、その後は大型計算機用の磁気テープだったこともあるが、8 インチのフロッピーディスクが一番多かった。そのどれも今では探し回っても見付けられない媒体である。調査項目の地点ごとの回答は音声記号で記録されているのだが、音声記号を英数字記号の組み合わせに置き換えて入力することにした。例を挙げると、スモールキャピタルの N は N9 になる。直接の担当は、当時の言語変化研究部第一研究室(変化一研)の私と白沢宏枝さん(元所員)だったが、その仕事はカードに鉛筆で記号化の仕方を書き入れることだった。入力業者には前処理をしたカードを渡し、業者は納品時にそのカードを返却するという流れになっていた。もちろん、デ

ータができたならそれを校正する作業も必須だ。

<時代の制約>

世の中のあらゆるものがそうであるように、我々の入力作業も当時の状況から来る制約から逃れることはできなかった。まず、音声記号の置き換え規則がそうである。変化一研で使っていたのは 8 ビットではあったが、いわゆるパソコンで、大文字も小文字も使えた。しかし、入力業者は当時の業務用の主流であった大型計算機用の仕事が普通であり、そこで使われる EBCDIC という記号体系でデータを作成する。EBCDIC では大文字しか使えない。仮に大文字と小文字が同時に使える状況だったら、置き換え規則はかなり単純化され、分かりやすくなっていたはずだ。また、入力業者によって記号体系に微妙な点で違いがあることも悩みの種だった。

大型計算機のデータの入出力の標準になっていたのは 80 桁のパンチカードで、納品が磁気テープであってもフロッピーであっても、80 桁が基本だった。そこで、80 桁に収まるようにデータの構造を設計した。しかし、これも、固定長であるがための苦肉の策で、語形が例外的に長い場合や、回答語形の数が 3 以上のときは特別な処理をしなければならなかった。

<データの公開と活用>

GAJ の第 1 集が刊行されるときにすべての回答を印刷して公開しようということになった。問題はプログラムで、私が作成したのだがこれが出版直前になってもなかなか完成しない。もし最後まで駄目だったら、せつかく入力したデータが日の目を見ずに朽ち果てるどころだったが、ぎりぎりまで待ってもらってやっと動くものができた。

その後、GAJ のすべての地図に対してはそのデータを印刷したものが資料一覧としてつけられるようになった。したがって、全データをほぼ記録された通りの形で見ることができる。また、その後の調査研究の中で電子化されたデータが整備され、直接いろいろな研究の材料として利用できるようになった。所期の目的が達成されてうれしい限りである。

ータを『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(p.2 ~ 3 参照)の構築に利用します。

この報道発表の資料は、国語研ホームページから御覧になれます。 http://www.kokken.go.jp/syokai/press/08_04/

報道発表で説明する前川グループ長



ことばQ&A

※このコーナーは、当研究所に寄せられた言葉についての質問をもとに作成しています。



質問 新聞紙上で見た「蛙観図」とは何と読めばよいですか。その意味は何ですか。



回答 この質問をしてきた人によると、その記事の中で使われていた文脈中の意味として、地図の「俯瞰図」に対する用語のようだった、とのこと。ところが、ひいてみた国語辞典には、どれにも項目がないというのです。

さて多くの語数の項目を立て、用法を実際の用例に基づきながら記述するタイプの国語辞典に、小学館『日本国語大辞典 第二版』があります。また、主に中国古典の伝統的な漢語を収録する漢和辞典に、大修館書店『大漢和辞典』があります。質問者の言う「ケイ-カン-ズ」の「ケイ」は、意符の「虫の部」に対する音符とおぼしき「圭（ケイ）」の字音からの類推による読み方です。実は「蛙」という字は音読みでは「ア」か「ワ」なので、「ア-カン-ズ」「ワ-カン-ズ」などの項目を探します。しかし、どちらの辞書にもその見出しはありません。

では、実際どこで使われているのか、インターネットで検索をしてみます。すると、日本地図センター編『新版 地図と測量のQ&A』（東京 日本地図センター、2003.5）の問53に「仰見図、虫観図、

蛙観図 Worm's-eye view とは？」という資料のあることがわかりました。資料の見出しで、類義語や英語表現が判明しました。国会図書館でこの資料を確認してみましたが、「ア-カン」なのか「ワ-カン」なのか、ここでも読み方がわかりません。また列挙している類義語同士の関係についても詳細はわかりません。

そこで、専門用語の辞書類の出番です。国語研究所の書庫に、日本国際地図学会 地図用語専門部会編集『地図学用語辞典 増補改訂版』（東京 技報堂出版、1998.2）がありました。なかには「あかんず 蛙観図」の見出しがあり、そこには空見出しで「ぎょうけんず 仰見図」を見よ、と矢印で送っています。「仰見図」の項では、地図学の統一用語ではないが同義語の類として「虫観図」があること、また「鳥瞰図」の対であることを明示しています。さらに「蛙観図（あかんず）」が、現在はほとんど用いられない語であることも明確になりました。意味は、地面や水平面から虫や蛙の見上げるような、非常に低い視点からえがいた透視図のことです。

このように日本語そのものを解説する辞書ばかりでなく、専門分野の術語を解説する辞書類もまた、重要な日本語資料と言えます。（山田 貞雄）

「ことば」フォーラムのお知らせ

今年度の「ことば」フォーラムは2回予定しています。

第34回「方言と敬語」（仮題）

国立国語研究所は、今年11月に愛知県岡崎市で「敬語と敬語意識の半世紀—愛知県岡崎市における第3次調査—」をテーマに経年調査をします。この調査の前に、岡崎市民を中心とする三河地域の皆様に国立国語研究所の研究・事業を広く知っていただくために、10月17日（金）午後、岡崎市内で開催を予定しています。

第35回は、「病院の言葉」（仮題）を予定しています。

詳細は、次号またはホームページでご案内します。

表紙のことば

表紙の写真は、国立国語研究所に大型電子計算機を搬入した時の様子です。昭和41（1966）年、当時の文科系の研究所として初めてコンピューターが導入されました。これにより、新聞や教科書などの大量データを扱う語彙調査が可能になりました。また計量的な分析や文脈付きの索引作成システムなど、計量国語学的な研究手法が確立しました。国語研究所のコンピューター第1号（HITAC3010）は、別棟の「電子計算機室」という部屋に設置されました。

CPU（本体）*大きな家具のように見える
磁気テープ装置 プリンター コンソール（操作卓）



最初の大型電子計算機

